

世界遺産・端島炭坑遺構の残る軍艦島の調査について

NPO 研究機構ジオセーフ
理事長 善 功企
(九州大学名誉教授)

NPO 研究機構ジオセーフは、今般、調査団を編成し「明治日本の産業革命遺産」として世界遺産に登録された端島炭坑遺構の残るいわゆる軍艦島並びにその周辺の調査を行いました。既にご承知の方も多いと思いますが、軍艦島は、長崎港から南西に約 19km の外洋に位置する人工の島で、東西約 160m、南北約 480m、外周は約 1.2km の護岸により囲まれています。海底の石炭採掘のため、明治後期から昭和に到るまで数次にわたる埋め立て・拡張により現在の姿になっていますが、現在は無人島です。この島には立坑などの近代化遺産や我が国初の鉄筋コンクリート製の高層集合住宅などの遺産があり文化的・観光的に注目されています。一方では、台風等によりたびたび被災し、島を護る護岸も倒壊や破損、背後の吸出しなどの被害を受けてきました。

今回の調査では、島を護っている古い護岸が「天川（あまかわ）」を用いて築造されており、この護岸も世界遺産であるという説明がありました。しかしながら、正直な所、メンバーの誰も「天川」については良く知りませんでした。「天川」とは一体何なのか、「天川」を用いて築造された護岸の維持・補修をどのようにするか、護岸の耐力はどの程度あるのか、万が一被災した場合、背後施設への影響はどの程度か、どのようにして原形復旧するのかなど、未解決の課題が多く残されていることが分かりました。このことは、護岸だけでなく他の施設等についても同様に言えることだと思います。軍艦島を今の姿のまま自然災害から護り次世代に引き継いでいくためには、今なすべきことは何か、みんなで考える必要があると思います。

なお、今回の調査の概要については、調査団のメンバーがまとめているので、興味のある方は是非ご参照・ご批判をいただければ幸甚です。

最後になりましたが、長崎市世界遺産推進室の川原主幹、栗脇主査には現地での案内・説明等、大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。